

13. 新人の生活拠点の選択について

約4万年前に日本列島にたどり着いた新人は、やみくもに山野を歩きまわったのではないと思います。まずは食料を確保するために、獲物があるまたは活動する場を見つける必要があったものと思われます。そして、いくら食料があるといっても、自らが被害にあうようなところを避けなければならないわけで、彼らにはどのようなところが目安だったのかは大変重要なことであったと思われます。もちろん、これまでの経験とか暗黙知のようなものもあったのですが、大変に興味のあることだと思います。今の我々であれば、どこに住むのかということになれば、利便性や経済性、自然性とかを重視し、どちらかという食は、考慮外ということになっていると思います。

新人は、まず植生と地形に着目したように想像します。理想は平地で獲物が生息して食料となる植物もあり、水場も近いということでしょう。しかし、実はこの平地は暮らすためには様々な危険もあります。それは、獣害や水害というような自然災害が起きることです。となれば、山地の裾部に近いところ、あるいは小高いところをベースキャンプにして周辺を縄張りにするということになると思います。しかし、このベースキャンプの良しあしは、丘陵地の裾部だけでなく、背後の状況にもよります。裾部は背後の影響を受けない安全なところで使い勝手が良いところであってほしいわけです。

使い勝手とは、見晴らしがよく、背後地が広く深く狩猟ができるところ、水が近くにあるということになります。

そういう意味では、地形的に漸移する形状よりは段差的な明確な境界があるようなところが安全確保や暮らすための環境整備上も有用であるということが認識されていたようです。もちろん、時間が経過して行動範囲が広がっていけば岩谷洞窟といったところをベースにして暮らすという形態もあったでしょう。

このように考えると、河川の段丘とか台地といったある程度の広さがあって平坦で、かつ段差的なものがあるというのが形態的には魅力的ということになります。たとえば規模が大きく直線的な起伏がしやすい活断層域などは興味深かったのではないかと想像します。実際に、旧石器時代の遺跡は多数発見されていますが、その中の多くが台地や段丘に展開されています。このような地形は、比較的平坦で広く、標高もあるので見晴らしが良く、自然災害地形でないところも多いので、選択したような気がしています。なんとといっても、自然災害や獣害は大変な恐怖ですので、直感的にそのようなところを峻別する能力は敏感で優性であったと思われます。つまり、不利なものをおかわすという能力は先天的であったように思います。